

学生時代と図書館57

- 図書館がスペインでの生活空間のアルファとオメガ -



新田 増



スペイン北部にあるナバラ大学へ留学するというので、フランス郵船社の貨客船でヨーロッパへ向かった。香港の次はサイゴンだった。ちょうどヴィエトナム戦争が激化し、サイゴン港沖で一両日待機、わたしたちの便から入港ができなくなった。マニラ、コロンボ（スリランカ）、ボンベイ、ジブチー、スエズ運河、エジプト、そして地中海を横断、フランスのマルセイユ港に到着した。ヨーロッパに上陸、初めて、長い船旅で見てきた未開の地からやっと文明世界へ戻ったというのが率直な実感だった。陸路ポルト・ボウからバルセロナに入り、夜行列車で目的地のナバラ州の主都パンプロナ市に向かった。車中は、サンフェルミン祭に向かう乗客でドンチャン騒ぎで、目的地への到着はお祭りの前夜祭、1966年7月6日早朝のことであった。

大学では哲文学部ロマンス語学科に入学、当然だが、文学とともに、主に、ラテン語から諸ロマンス語への変遷を比較歴史言語の方法で学んだ。当時スペインの大学はまだエリート教育で、深い専門知識が求められた。そのためには、図書館利用、それも効率的な正しい利用が不可欠であった。大学課程の中に「イスパニア図書学」が組み込まれており、一年間を通じ、実践・理論面から、書籍の分類、図書館の利用法について詳しく教えられた。また「ロマンス言語学」の授業中でも、実際に図書館のカード作りを実践訓練として手伝わされた。当時は未だ、分類は手書きかタイプライターによるカード作りで、コンピュータにインプットするのは未だかなり先のことであった(実際ナバラ大学での情報化は1983年に始まっている)。そのとき学んだ図書学の知識は、それ以降、専攻分野に係わりなく、つねに不可欠で貴重なものとなっている。学部終了後は、修士論文に引き続き、博士論文作成に入るが、研究室として図書館内に席を割り当てられる。自分の専攻分野に関わる書籍が集中している場所に席を確保することで最も効率よく書棚から必要な書籍を取り出せることになっている。書棚からは、自分の名前と机の番号が入ったカートンに、図書番号と日付を書き込みさえすれば、好きな書籍が自由に取り出せる仕組みである。誰かが、私の机にある書籍を必要とした場合、彼の名入りのカートンを置き、その本を持去ることができる。すなわち、各人の机の上は図書館の書棚の延長と考えられているのである。

当時、ポストソシュール派の代表的な碩学エウヘニオ・コセリウが「一般言語学」の集中講義のためナバラ大学へ招聘されていた時、図書館で私の真向かいの席を占めることになった。そんな、幸運で興奮した状況が1月ばかり続いた。講義では、彼の人並みはずれた広い言語知識に裏打ちされた明晰で厳格な論理構成の展開に驚嘆させられたのは、わたくしだけではなかったであろう。

書籍が溢れ置き場がなく、狭くなったナバラ大学の古い図書館、その新館が1998年に開設され完全に様変わりした。すべてがガラス張り、建物の両窓側に利用者用に4人ずつの席が並び通路がある、書棚はその通路の内側、すなわち、建物の内部に設置され、太陽が書籍に直接とどかぬよう配慮されている。

以前よく利用したナバラの王立総合古文書館は、州庁の建物から離れ、2年前2004年に、都心部の北側に移された。昔のナバラ王国の王宮跡を改築した、威風堂々たる建物で、ナバラ大学学生時代からの友人マルティネナ館長の話では、書棚を合わせると全長が40キロメートル以上に達するという。先日ある古文書を探しに、初めてこの新しくなった総合古文書館を訪れた。今では書類のデジタル化がかなり進んでいるとのこと、しかし私が求めた書類の束は、まだその恩恵を受けていなかった。運び出された書類の山から探していた羊皮紙をやっとの思いで見つけたときは、いつもの「やった！」というのが素直な喜びの気持ちだった。デジタルコピーを申請すると、2日後には4ユーロと交換でCD-Rが手渡された。

国が栄え、人間の知的営為の蓄積・宝庫である図書館や古文書館が強化・増設されている。地球の温暖化、環境破壊、砂漠化が進む中でも、人は生き、耐え、考え、読み、書き続ける。

にっ た ます (教授・スペイン言語学・ロマンス言語学)